読書推進運動

公益社団法人
読書推進運動協議会
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-32
出版クラブビル６階
TEL　03(5244)5270
FAX　03(5244)5271
発行人　佐々木　泰
編集人　片岡　伸子

No.683

定価60円　会員の購読料は会費の中に含まれる

★「読書週間」がはじまります！（２頁）
★第54回「野間読書推進賞」受賞者決定（３頁）

「読書週間」によせて

「きっかけ」が大切

公益社団法人読書推進運動協議会　理事
株式会社日教販代表取締役社長
渡部正嗣（わたべたかつぐ）

日教販といえば、教科書・辞典・学習参考書というイメージを持っている方が多いと思いますが（たいへんありがたいことなのですが）、会社設立の翌年には、図書の普及と読書の推進を図るため社内に「モデル図書室」を設置し、１０００校２５００名の学校関係者が来観されたとの記録が残っております。また、第１回全国小中学校作文コンクールを主催したり、第１回青少年読書感想文全国コンクールに協賛したりしています。

児童書の学校巡回販売も日教販が最初に始めたと聞いており、現在も出版社さまのご協力のもと継続しております。私も若いころは、５月になると書店さまと一緒に学校を回りました。学校によっては図書室が４階にあり、10箱以上持って上がったときには足がガクガクになったのを覚えています。

今では図書館に漫画があるのがあたり前のようですが、当時の学校図書館には、『はだしのゲン』くらいしか置いてありませんでした。学校図書館に漫画はいらないという時代でしたが、漫画版の日本の歴史、世界の歴史が各社から刊行されたことを契機に、学校図書館の選書基準が「どうやったら生徒が図書館に足を運んでくれるか」に変わったような気がします。その後、古典も漫画になり、「まずは生徒が興味を持つことが大事。いきなり授業で習うよりも、あらかじめ漫画でふれている方が古典に入りやすい」という声も先生方から聞かれるようになりました。

また、日教販では、毎年、『国語の教科書に出てくる本』というカタログを刊行し、学校図書館からたいへん好評をいただいております。教科書で出会った物語を最初から最後まで読んでみたいという子どもたちは意外に多いのです。

新学期シーズンに開催する「学習図書まつり」は今年で72回を迎えました。１９５３年の第１回から、参考書・辞典の紹介、書店店頭の活性化を目的に、書店さま・出版社さまにご協力いただいております。開催期間中は、ポスター・しおり・ポストカードの配布、飾り付けコンクールやアンケート回答者へのプレゼントキャンペーンの実施、ＳＮＳでの情報配信などを行っています。今年はKADOKAWAさまの『文豪ストレイドッグス』をイメージキャラクターに据えたところ、アンケート回答者が昨年の約３倍にまで増加するなど、大いに盛りあがりました。人気キャラクターの求心力に驚かされた次第です。

夏から秋にかけては、首都圏のお客さまを中心とした「書店様研修会」を開催しております。今年は早稲田摂陵高校の米田謙三先生を迎え、「生徒の気づきと学びの最大化－ワクワクを大切に－」と題した講演を行っていただきました。児童・生徒が興味を持つきっかけが大切なのだとあらためて感じました。

今後も日教販は、「教育と歩みつづける」をモットーに、教科書・辞典・学習参考書から児童書・文芸書までほば広くカバーした各種試みを通じ、読書推進に貢献していく所存です。

私個人としては、あまりネットに頼らず、きっかけの宝庫である辞書をめくるようにしたいと考えています。

書店、図書館、学校、そして街へ「この一行」に逢いにいこう！

10月27日(日)より、「読書週間」がはじまります。今年の標語は「この一行に逢いにきた」。

これまでにない雰囲気のポスターは、好評をいただいています。「図書館だより」などへのポスター画像の掲載は、加工（縦横比率の変更、色の置き換え、画像の切り抜きなど）せずにそのままの形でしたら、問題ありません。SNSへの画像投稿も同様に、加工せずにぜひ、お願いいたします。

ポスターは公共図書館へは各道府県読書推進運動協議会・各都道府県立図書館、学校図書館へは全国学校図書館協議会、書店へは日本出版取次協会の協力により各販売会社を通じて配布しております。部数追加をご希望の施設や団体は、遠慮なく当協議会事務局へお申しつけください。

また、過去のポスターデータの貸出も例年同様に行っておりますので、興味をお持ちの方は事務局までご連絡ください。

ホームページ「素材集」のポップやしおり、ブックカバーのデータも公開しております。今後のデータ作成の参考といたしますので、活用事例など、ご意見、ご感想をぜひ、事務局までお寄せください。ポスターのJPEGデータもこちらにあります。

本年も、「読書週間」雑誌広告を用意し、日本雑誌協会の協力により各雑誌出版社へ掲載を呼びかけました。10月1日現在で、17社68誌の協力をいただいております。おもに10月中旬～11月初旬発行の雑誌に掲載されます。当会公式X（旧Twitter）でも、広告掲載情報を随時投稿いたしますので、書店で見かけましたら、ぜひ、手にとってください。

公式Xではその他、「#読書週間」「#この一行に逢いにきた」をつけて、ポップ活用例を投稿したり、図書館・書店の投稿をリポストしていきたいと考えております。いわゆる「中の人」がひとりで、どこまで手が回るか不安ですが、「読書週間」を盛りあげるためにも、みなさまもぜひ、投稿してください。

「この一行」を自由に書き込める
ポップデータも用意しています！

書店では、先月ご紹介した図書カードNEXTが当たる「読者還元祭」が10月26日よりはじまります。

全国の公共図書館、図書室で開催されました行事について、「読書週間」終了後に各道府県読書推進運動協議会より報告をいただき、来年4月に本紙別冊付録「行事報告一覧」を発行します。

■2024年度・第54回『野間読書推進賞』決定

9月13日㈮、東京都千代田区の出版クラブビルで行われた『第54回 野間読書推進賞 選考委員会』において、2024年度の受賞者が左記のとおり決定しました。

（敬称略）

《団体の部》
・デイジー岩手（岩手県盛岡市）
《個人の部》
・勝治 粂（鹿児島県大島郡龍郷町）
《奨励賞》
・明徳館ボランティアの会（秋田県秋田市）

今年度の野間読書推進賞は、例年同様、道府県読書推進運動協議会や教育委員会などに受賞候補者の推薦をお願いしました。

いただいた推薦数は、団体の部15（前年20団体）、個人の部2（前年3人）です。

8月26日㈪に開かれた、事業委員会による第一次選考会では、事前に委員に資料を送付し、会議当日に各候補者への評価とその理由を討議、選考会に向けて11団体2個人を選出し、選考委員会に提出しました。

選考委員会も、第一次選考会と同じ形式で開催され、慎重な討議の結果、前記の受賞者が決定しました。

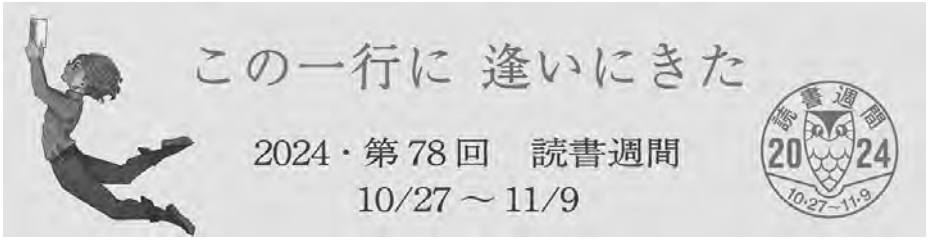
団体の部受賞のデイジー岩手は、1999年設立。岩手県立視聴覚障がい者情報センターの運営に協力し、一貫してデジタル録音図書の製作と普及に取り組んでいます。昨年度までに製作した録音図書は5363タイトルにおよび、昨年度の貸出数は3724タイトル、ダウンロード数は2363タイトル、利用者はのべ4万6076人と、岩手県内外を問わず利用されています。製作技術向上のため研修と情報共有を定期的に行い、また、視聴覚障がい者情報センターの録音図書ボランティア養成講座に協力し、後進の育成にも尽力しています。

個人の部受賞の勝治粂さんは、教員・公民館館長を歴任。公民館館長時代に移動巡回図書など読書活動の支援に尽力しました。退職後、1996年に読書グループ「にじいろの花」を立ちあげ、リーダーとして、子どもの読書環境を整え、読書の楽しさを伝えています。90歳を超えてなお、小学校での週1回の読み聞かせ、地域とのコミュニケーションを目的としたイベント、地域行事の由来の語り聞かせを行い、その活動は多岐にわたっています。今年7月には、奄美大島で行われた教職員の研修会で、読書活動の実践発表を行うなど、島内の読書活動の推進にも大きな影響をもたらしています。

奨励賞の明徳館ボランティアの会は、1983年設立。秋田市立中央図書館明徳館を拠点に活動する団体で、昨年40周年を迎えました。読書支援、実演、環境整備（2グループ）、大型紙芝居制作の5つのボランティアグループの集合体で、今年4月の会員数はのべ111名。活動は図書館外にも広がっており、中学生・高校生の職場体験やインターンシップの指導、市内各施設での訪問おはなし会などにも携わっています。2004年には、中央図書館明徳館と共同で、秋田県内外の図書館ボランティアへのアンケートなど調査報告書も発行しています。

今年度も、全国よりすばらしい候補者の推薦がよせられました。第一次選考会、選考委員会ともに、苦労しての選考となりました。ご推薦いただいたみなさまへ、感謝申しあげます。

贈呈式は11月7日㈭、午前11時より、東京都千代田区神田神保町の出版クラブビルで開催します。



読書推進運動協議会
公式X（旧Twitter）

「読書週間」を
応援してください！

読書推進運動協議会は クラウドファンディングを実施します

今年も「読書週間」のシーズンをむかえます。

「読書週間」は1947年に始まりました。私たち読書推進運動協議会は長きにわたってこの国民的な運動を主催してきました。第78回をむかえる今年も、

・「全国優良図書グループ表彰（第57回）」の実施
・「野間読書推進賞（第54回）」贈呈式開催
・ポスターおよび広報文書配布（ポスターはコピー、イラストとも公募、5万3000枚を制作し、全国の学校、公共図書館、書店などに配布しています）
・各種行事推進のため全国の読書推進運動協議会に補助金を送付

などの活動をしております。

これらを実行するためには、多額の費用がかかります。公益社団法人である読書推進運動協議会にとって、その原資は出版、図書にかかわる会社さまや団体さまからの会費収入です。

残念ながら会員数はすこしずつですが減少傾向にあり、さらに昨今のインフレ傾向により制作物の製造コストやデリバリーなどの各種経費は増加、結果として法人としては慢性的な赤字状況となっています。ちなみに2023年度の決算は700万円を超える赤字となりました。

ご協力金額に応じ、返礼品を用意しています
【右】「読書週間」オリジナルコースター
【左】春もご好評いただいたポストカード

このような状況に鑑み、私たちは今年の春「こどもの読書週間」のタイミングにあわせて初めてのクラウドファンディングにトライしました。結果37名の方から30万円を超えるご寄付をいただきました。あらためて感謝を申し上げます。

活字離れ、書店の減少、本を読まない人の増加など読書をとりまく環境はきびしいものがあります。だからこそ「読書週間」を中心とした読書推進運動のねばり強い、息の長い継続が必要と考え、このたび第2回のクラウドファンディングを実施することとしました。

左記にアクセスいただいて、日本がいつまでも「本を読む国民」の国であり続けるための運動に対して、ぜひご協力をいただきたくお願い申し上げます。

●サイトオープン予定
2024年10月25日㈮
（11月22日終了予定）
https://camp-fire.jp/projects/798295

クラウドファンディング
QR コード

■「BOOK MEETS NEXT」

全国9都市でイベント開催！ 書店でのキャンペーンも

出版界が一丸となって進めるキャンペーン「BOOK MEETS NEXT」（10月26日～11月24日）の、今年の概要が発表された。

今年は、本の魅力をまだ知らない人々に、書店の店頭だけでなくはば広い入口を通して、その楽しさを伝えていくことに重点が置かれている。

10月24日㈭には、東京都新宿区の紀伊國屋ホールで、安部龍太郎さん（作家）、川原繁人さん（音声学者）、北山陽一さん（ゴスペラーズ）を迎えて、オープニングイベントが開催され、親子でも参加できるプログラムが予定されている。

各地域の書店・図書館・大学・自治体などが連携してのイベントは、山梨・東京・名古屋・三重・京都・大阪・神戸・広島・福岡の9都市での開催。各地の個性を活かして、作家の講演会やトーク、ワークショップが予定されている。

そのほか、参加書店店頭では、図書カードが当たる「秋の読者還元祭」、知念実希人さんの本格児童書ミステリ『放課後ミステリクラブ』フェア、各書店オリジナルイベントも実施される。SNSでの「ハッシュタグキャンペーン『わたしの推し本』」でも、抽選で図書カードが当たる。

オープニングイベントや地域イベントには、事前申し込みが必要なものもあり、申し込み方法を含め詳細は随時、BOOK MEETS NEXT公式サイトで紹介される。

●BOOK MEETS NEXT 公式サイト
https://book-meets-next.com/

QR コード

本との新しい出会い。はじまる。
BOOK MEETS NEXT

BOOK MEETS
NEXT ロゴ

■「第57回 造本装幀コンクール」表彰式

受賞者たちの装幀にかける思いが伝わるスピーチ

第57回「造本装幀コンクール」の表彰式が9月30日(月)、千代田区神田神保町の出版クラブビルで行われた。日本書籍出版協会・日本印刷産業連合会が主催し、出版物について印刷、製本、装幀、デザインなどの観点から評価、顕彰するアワードだ。今回は327点の応募のなかから21の賞が選出された。

各賞の表彰に続いて、審査員が選ぶ「三賞」の受賞者代表が謝辞を述べた。文部科学大臣賞の文部科学大臣賞『Je suis là ここにいるよ』(月とコンパス)については版元代表の西山雅子さんが、ひとり出版社を2020年に立ちあげ、この本が2冊目の出版物であること、著者のシズカさん、装幀者の坂川朱音さんと試行錯誤しながら、トレーシングペーパーを挟む造本に結実した経緯を説明し、夢のある本づくりと効率は相反するものではないと語った。経済産業大臣賞の『心臓』(ふげん社)においては、版元代表の渡辺薫さんが、自身が立ちあげた出版社「渡辺美術印刷」で、おもにアート系の本を手がけていること、手に取ると紙粉が落ちるような「あらあらしい」造本は、デザイナーの町田覚さんのアイデアであるとスピーチ。東京都知事賞の『鍵のかかった文芸誌』(菊池拓哉)では、装幀のo-flat inc.永田洋平さんが、個人出版を企画し、著者でもある、菊池拓哉さんから「鍵」というお題を受けてから長く思い悩み、コンビーフ缶の鍵の形状のプランで入稿直前までいったこと、最後は本を貫通する鍵穴と金属の鍵のスタイルにいたったこと、暗中模索した時間の長さについて語った。

後援団体賞である「読書推進運動協議会賞」では、今年は食にまつわる企画性の高い1冊を選出した。白い立体装幀、坂田阿希子著の『RESTAURANT B RECIPE BOOK』(文化出版局)を表彰することができた。他の賞については公式サイトを参照のこと。

なお、9月30日から11月1日の期間、受賞作品をはじめ全応募作品327点が出版クラブビル、クラブライブラリーで公開展示されている。また「造本装幀コンクール」の入賞作品は、毎年2月にライプチヒで開催される「世界で最も美しい本コンクール」に出品される。

●造本装幀コンクール公式サイト
https://www.jbpa.or.jp/zohon/zohon-winning.html

個性豊かな受賞者がそろった記念写真

クラブライブラリー展示では実際に受賞作を手に取れる

■「2024年 紙芝居講座」

対面とオンラインが選択可能！紙芝居の基礎・理論を学ぶ

紙芝居文化の会は、11月9日(土)・10日(日)の2日間にわたり、「2024年 紙芝居講座 地球をまるごと紙芝居でつつもう―平和を求めて」を、対面(会場=出版クラブビル〈東京都千代田区〉)とオンライン形式で開催する。

講座では、基本を大切にしながら、新しい角度から、紙芝居を演じることを深め、また、平和のために紙芝居ができることはなにかも探っていく。講師による多くの紙芝居の実演を通して、紙芝居の特性や表現理論、実演の基礎、世代・ことばを超えたコミュニケーション文化としての紙芝居のあり方を学ぶことができる。

9日には、前川喜平さん(現代教育行政研究会代表)を招き、講演「現代の教育と平和」も予定されている。また、会場では、紙芝居のサインセールも行われる。

参加には、事前の申し込みと参加費が必要(1日のみの参加も可)。会場参加の申込締切は11月6日(水)(延長しました)、オンライン参加の申込締切は11月9日(土)で、定員になりしだい締め切る。申込方法、プログラムの詳細は、紙芝居文化の会ホームページで確認できる。

また、紙芝居文化の会は12月7日の「世界KAMISIBAIの日」に、日本中、世界中で紙芝居を演じてほしいと、呼びかけている。同会のイベント、全国の取組も、ホームページで随時、紹介される。

●紙芝居文化の会ホームページ
https://www.kamishibai-ikaja.com/

講座申し込みQRコード

昨年度の紙芝居講座　会場風景

■JBBY50周年記念事業

作家・画家が「子どもの本と世界」について語るシンポジウムを開催

一般社団法人 日本国際児童図書評議会（JBBY）は、11月16日(土)に、東京都千代田区の出版クラブビルにて、「50周年記念国際シンポジウム　今、子どもの本は世界とどうかかわるのか」を開催する。

シンポジウムは2部構成。第1部では、JBBY創立50周年を記念して国際舞台で活躍する子どもの本の作家・画家から送られた、シンポジウムのテーマ「今、子どもの本は世界とどうかかわるのか」にそった短いメッセージビデオを上映。第2部で、前半のメッセージをもとに、子どもの本の作り手（作家、写真家、翻訳家）が、子どもの本と世界の関わりについて議論する。

JBBY50周年特別ページよりシンポジウム
詳細が確認できる

第1部では、デイヴィッド・アーモンドさん（イギリス）、ジャクリーン・ウッドソンさん（アメリカ）、デボラ・エリスさん（カナダ）、グスティさん（アルゼンチン）、ピーター・シスさん（チェコ）、ラフィク・シャミさん（シリア）、曹文軒さん（中国）、ビヴァリー・ナイドゥーさん（南アフリカ）、キャサリン・パターソンさん（アメリカ）、降矢ななさん（日本）、クォンユンドクさん（韓国）、エミリー・ロッダさん（オーストラリア）がビデオ出演する。国際アンデルセン賞受賞者はじめ、各国の一線級の作家・画家からによる、さまざまな観点からの問題提起が期待される。

第2部のパネリストは、岩瀬成子さん（作家）、長倉洋海さん（写真家）、さくまゆみこさん（翻訳家）の3名が務め、第1部で提起された問題をさらに掘りさげて、考えていく。

参加には、事前の申し込み（先着順）と参加費が必要。参加方法は、JBBY公式ホームページで確認できる。

現在、JBBYでは、50周年記念事業、および、今後の事業継続のための寄付を募っている。寄付金額に応じ、これまでに発行したブックガイドのバックナンバーや、国内外の子どもの本関係者の書きおろしエッセイと会報バックナンバーからの抜粋原稿も掲載する「50年史『こどもとほんのJBBY50年のあゆみ』」（今秋発行予定）などの返礼品も用意されている。こちらも、ホームページで詳細を確認できる。

JBBY では寄付金額に応じ
各種返礼品を用意

●JBBYホームページ
https://jbby.org/

■IICLO オンライン講座

戦争と平和、さまざまな分野の多様性を子どもの本から考える

一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団（IICLO）は、現在、オンライン講座「2023年に出版された子どもの本から」を配信している。

講師は、土居安子さん（大阪国際児童文学振興財団 理事・総括専門員）。2023年に日本国内で発行された絵本・児童図書約300冊をテーマやジャンル、年齢別に紹介し、現在の子どもの本の傾向について考える。今年は全体を通したテーマとして「戦争と平和」を取りあげ、国・民族・時代を超えて子どもの本でつながる可能性も探っている。参加者は、紹介図書の書誌情報と簡単な紹介文のリストを閲覧でき、後日ゆっくりと選書の参考にすることもできる。

約２時間にわたり、昨年の子どもの本の
傾向や、特徴的な図書の紹介が行われる

参加には、申し込みと参加費が必要。IICLOホームページで申し込み方法を確認できる。申し込み・配信期間は12月16日(月)まで、期間中は何回でも視聴が可能。講座は動画配信サイト「Vimeo」（事前の会員登録などは不要）で配信される。各種設定は申し込み後に案内される。

また、IICLOは、11月2日(土)に、絵本『ミッケ！』の作者ウォルター・ウィックによる、小学生対象のワークショップ「鏡をつかってチャレンジミッケ！ウォルター・ウィックさんの絵本の世界を楽しもう」と、中学生以上対象の国際講演会「アメリカの絵本作家 ウォルター・ウィック 自作を語る」を、大阪府立中央図書館で開催する。こちらも申し込み（先着順）と参加費が必要。

●IICLOホームページ
http://www.iiclo.or.jp/

■高橋松之助記念「朝の読書大賞」「文字・活字文化推進大賞」

20年間、毎日「朝の読書」を継続！地域と結びついた実践などを評価

公益財団法人 高橋松之助記念顕彰財団は、9月20日㈮、「第17回高橋松之助記念『朝の読書大賞』『文字・活字文化推進大賞』」の受賞者を発表した。

●第17回 高橋松之助記念

○朝の読書大賞

・大江学園 福知山市立大江小学校・大江中学校（京都府福知山市）

・学校法人 開成学園 大宮開成中学校（埼玉県さいたま市）

・愛知県立豊橋南高等学校（愛知県豊橋市）

○文字・活字文化推進大賞

・鳥取県立図書館（鳥取県鳥取市）

「朝の読書大賞」は朝の読書で顕著な実績のあった学校に、「文字・活字文化推進大賞」は文字・活字文化に振興に業績のあった地方自治体・団体・個人に贈られる。

福知山市立大江小学校・大江中学校は、約20年、毎日10分間の朝の読書を継続。小学校1～4年生向けの図書スペースと、小学校5年生～中学生向けの合同図書館はともに、学校司書と図書委員による企画で活気にあふれている。

大宮開成中学校は開校以来20年、毎日、朝の読書を20分間継続。読書が苦手な生徒へ電子書籍や古典の漫画版を勧めるなど工夫している。図書委員では大型書店での選書ツアーや、各委員が図書館の書棚で推薦図書を展示をするブックマンションも実施している。

豊橋南高等学校も、約20年の間、毎日の朝の読書を継続している。図書委員をはじめ、生徒の自主的な活動も盛んで、地域とも連携し、市内図書館で同校生徒のポップ巡回展示や読み聞かせ会を定期的に行っている。

鳥取県立図書館は、1990年の開館時より地元書店との共存を考え、図書購入だけではなく書店と連携したさまざまな活動を展開。また、ビジネス支援、地域の課題解決の支援、学校図書館との連携など、「県民に役立ち、地域に貢献する図書館」を実践している。

贈呈式は11月1日㈮、出版クラブビル（東京都千代田区）で開催される。

優良読書グループの歩み ⑽

2023年度の「読書週間」に際して道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。（順不同）

ブックスカフェ

代表者　一條志津子

秋田県鹿角郡小坂町

〈推薦〉
秋田県読書推進運動協議会

小坂町「ブックスカフェ」は、2002年に図書館児童サービスの読み聞かせボランティアが中心となり始まりました。メンバーの転居などがあり、現在は4名で運営しています。出演者とプログラムの打ちあわせをするのが代表で、会費の集金や管理をする会計係、広報担当と分担して運営しています。

朗読会のプログラムは、設立当初から山本周五郎作品の素読をライフワークにしている谷京子さんを中心に生のピアノのBGMを加えて、本の楽しさを会員と共有しています。振り返れば、デキシージャズバンドや国内一流のチェリストを迎えた年もありました。今ではおもに秋田県出身のオペラ歌手とコラボレーションをしています。

ブックスカフェには、近隣の市や町からも来町して楽しまれています。ご高齢の会員も増え、講演後、それぞれの近況を語りあう、谷さんを囲んでの「お茶の時間」も、今では楽しみのひとつになっています。

図書館の一室から始まった「ブックスカフェ」の私たちの小さな活動は、活動とともに会員数を増やし続けて大所帯となり、今年で21年目を迎えました。私たちは「心を温めた言葉やメロディーを個々の感性をとおして伝え合い、豊かでやさしい時間を創っていきましょう」をモットーに活動を続けてきました。ここまで会員を増やし、継続することができたのは、朗読会とミニコンサートを一緒に行うことで朗読会参加者の楽しみ方のはばを広げてきたためだと思っています。これには朗読会の会場も大事だと思っています。これまで明治の芝居小屋「康楽館」、旧保育園の建物「天使館（旧聖園マリア園）」、「中小路の館」といった文化財を会場にしてきました。建物の落ち着いた雰囲気は、朗読会参加者の気持ちを落ち着かせ、朗読に対する気持ちを高めてくれます。朗読の輪を広げる活動としては「手前ブックスカフェ」を皮切りに、大人の朗読会の開催、図書館主催事業への協力も積極的に行っています。

これからも私たちブックスカフェは、大事にしてきたモットーを忘れずに活動を続けていこうと思います。そして、継続していくことが朗読の輪をさらに広げてくれるものだと信じています。

大好評の大人の朗読会は今年も開催されました！

2025年

第67回「こどもの読書週間」
2025年4月23日～5月12日

第79回「読書週間」
2025年10月27日～11月9日

標語募集！

2025年 第67回「こどもの読書週間」と第79回「読書週間」の標語を募集します。

この標語は12月中旬に公益社団法人 読書推進運動協議会の事業委員会で選定し、それぞれのポスターに刷り込んで全国の新聞社・雑誌出版社へ、また道府県読書推進運動協議会、都道府県立図書館を通じて公共図書館などへ、全国学校図書館協議会を通じて全国の学校へ、出版取次各社を通じて全国の書店に送られ掲出されます。

「こどもの読書週間」のポスターは、ザ・キャビンカンパニーのイラスト・デザインを予定。秋の「読書週間」は、4～6月に募集するポスターイラストとの親和性を高めるため、この時期に標語を募集します。これまでの標語は、当協議会ホームページでご覧いただけます。

●《応募要項》

①標語案＝どちらも、読書の豊かさ、奥深さ、楽しさ、有用性などを新鮮な感覚で表現した未発表のもの。「こどもの読書週間」標語は、子どもの読書を念頭にご応募願います。

②応募用紙＝官製はがき、A4判ファックス用紙、メール

③応募作品数＝「こどもの読書週間」「読書週間」ともに、ひとり3作まで応募可。返却はいたしません。学校など団体での応募は、下選考をお願いします。（入選作の版権は公益社団法人読書推進運動協議会に帰属）

④締切＝2024年11月11日(月)必着

⑤賞＝「こどもの読書週間」「読書週間」それぞれに、賞を用意します。▼入選（1作）図書カード1万円分、標語として採用▼次点（2作）図書カード5千円分▼佳作（20作前後）図書カード2千円分

⑥発表＝入選・次点まで（『読書推進運動』1月発行号紙上、佳作は賞発送で）

⑦送り先＝〒101－0051
東京都千代田区 神田神保町1－32
出版クラブビル6階
公益社団法人
読書推進運動協議会
「こどもの読書週間」標語係
または「読書週間」標語係
（どちらへの応募か明示してください）
・FAX 03－5244－5271
・メールアドレス＝hyogo@dokusyo.or.jp
件名は「こどもの読書週間標語応募」または「読書週間標語応募」

事務局報告（9月）

・3日＝「出版クラブ震災対策室」事務局会議出席
・5日＝令和6年度 文部科学省「委託事業（公衆送信）」の審査提出
☆9日＝機関紙『読書推進運動』682号入稿
☆9日＝第57回「全国優良読書グループ表彰」推薦締め切り
☆10日＝機関紙『読書推進運動』682号責了
☆10日＝第78回「読書週間」ポスター出来
☆13日＝機関紙『読書推進運動』682号出来
☆13日＝第54回「野間読書推進賞」選考委員会 開催
☆17日＝「野間読書推進賞」受賞者、推薦者に通知書等郵送
☆18日＝慶應塾生新聞会より取材
☆18日＝日本図書普及㈱訪問。読書週間について打ちあわせ
☆26日＝2024 第3回 常務理事会案内郵送
☆30日＝「野間読書推進賞」贈呈式運営について出版クラブと打ちあわせ
☆30日＝2025「若い人に贈る読書のすすめ」事業委員に進行スケジュール展開
・30日＝第57回 造本装禎コンクール、贈呈式と記念パーティ出席

お詫びと訂正

機関紙『読書推進運動』682号（2024年9月15日発行）の6ページ目に誤りがありました。ここに訂正し、お詫び申しあげます。

【誤】ひだまり
代表者　永島　睦子
階根健松江市

【正】ひだまり
代表者　永島　睦子
島根県松江市

●編集部&事務局のひ・と・こ・と

●私の両親は、「すくすく真っすぐに育ってほしい」と願い、私を「伸子」と名づけました。そのせいか、今年の「読書週間」の標語「この一行に逢いにきた」にちなみ、私の「一行」はなにかと考えたときに浮かぶのは、背筋をピンと伸ばして発せられたであろう台詞や、なにかに真っすぐに向かっていく姿勢を描写した一行ばかり。

●なのですが、数年前からふとしたときに、心にふっと浮かぶのは、「手袋をせずに外出しようと思うが、手が白すぎるような気がした。町を歩いてみようと思うが、靴があまりぴかぴかしているような気がした。」という、『モンテ・クリスト伯』の一部です。裕福な貴族から、自分の意志でほぼ無一文の身になった青年の描写なのですが、以前の生活への未練と二十歳そこそこのお洒落な青年の葛藤がぎゅっと詰まっていて、なんだか切なくなってきます。

●このあと、彼は自分と母の生活を支えるために、この未練と葛藤を断ち切る人生の大きな選択をするのですが、若いころ（同書における、当時の私の一行は『待て、そして希望を持て！』でした）は読み飛ばしていたこの一行になぜ、こんなに心惹かれるのか。年齢を重ね、母親のように若い世代を見守りたい気持ちが強くなってきたのでしょうか？

●一冊の本での「一行」遍歴を振り返るのも、なかなかおもしろいものでした。この「読書週間」、「この一行」との出逢いをいろいろな形で楽しんでください。（伸）